

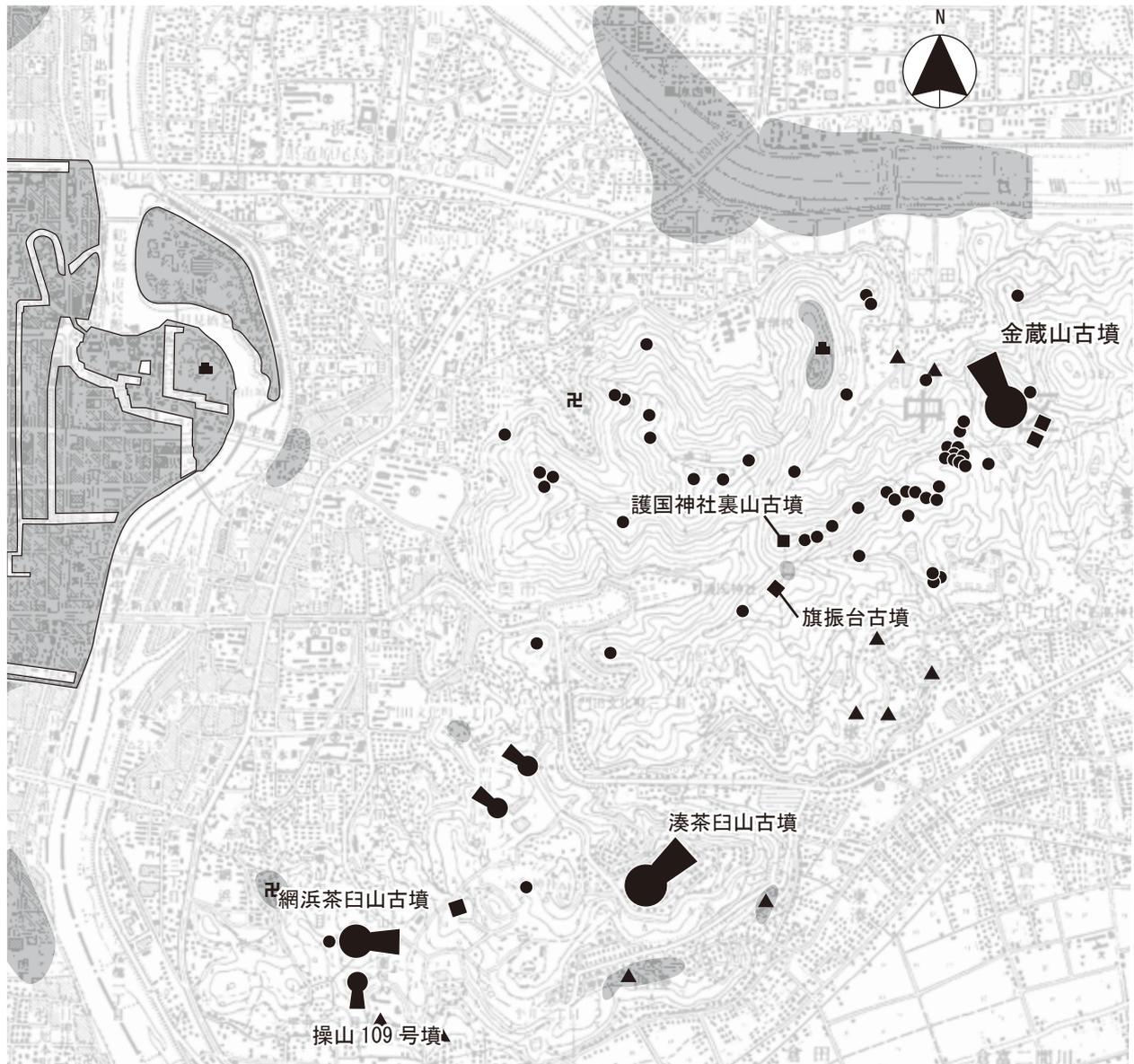
かな くら やま こ ふん
金 蔵 山 古 墳

範囲確認調査（第 4 次）現地説明会資料

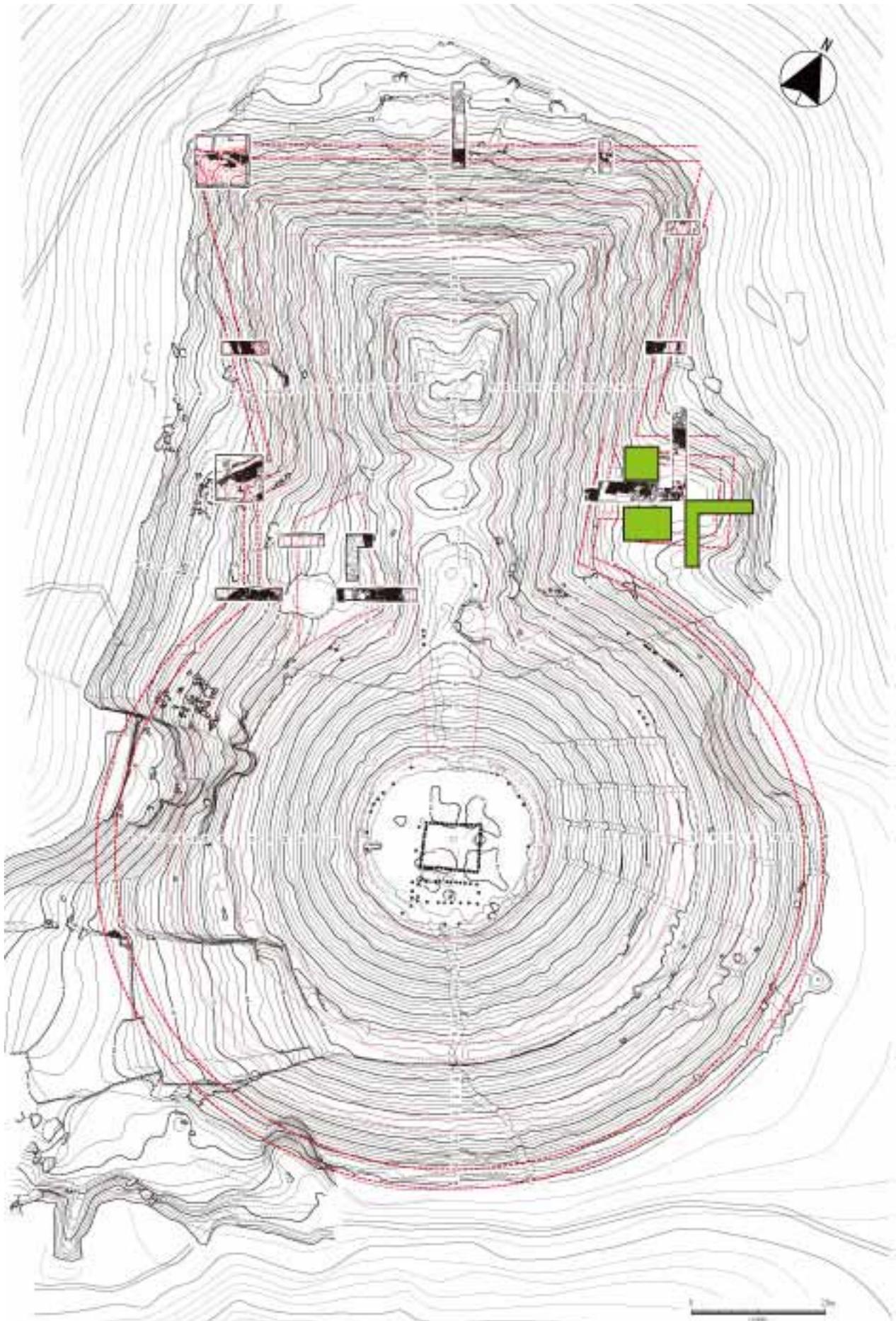
古墳の概要

操山丘陵のほぼ中央、標高 100 m ほどの山頂に位置する前方後円墳です。墳長 165m といわれ、四世紀後半から五世紀初頭に造られた古墳と考えられています。造山古墳築造以前では中国、四国、九州地方で最大の古墳です。明治期以降数多くの出土品が出土したといい、昭和 28 年には倉敷考古館を中心に発掘調査が行われました。発掘調査は後円部墳頂を中心に行われ、2 基の竪穴式石室、副葬品用の小石室、それぞれの石室を囲む埴輪列などが見つかるとともに、多量の副葬品、多彩な埴輪類が出土しました。

現在、古墳全体が山林となっており、古墳全体を観察することはほとんどできません。吉備を代表する古墳のひとつであり、規模や埋葬施設などの遺構、優秀な副葬品や埴輪類など学術的、学史的にも非常に価値が高く、保護や活用を図っていくことが課題となっています。



金蔵山古墳と周辺の遺跡

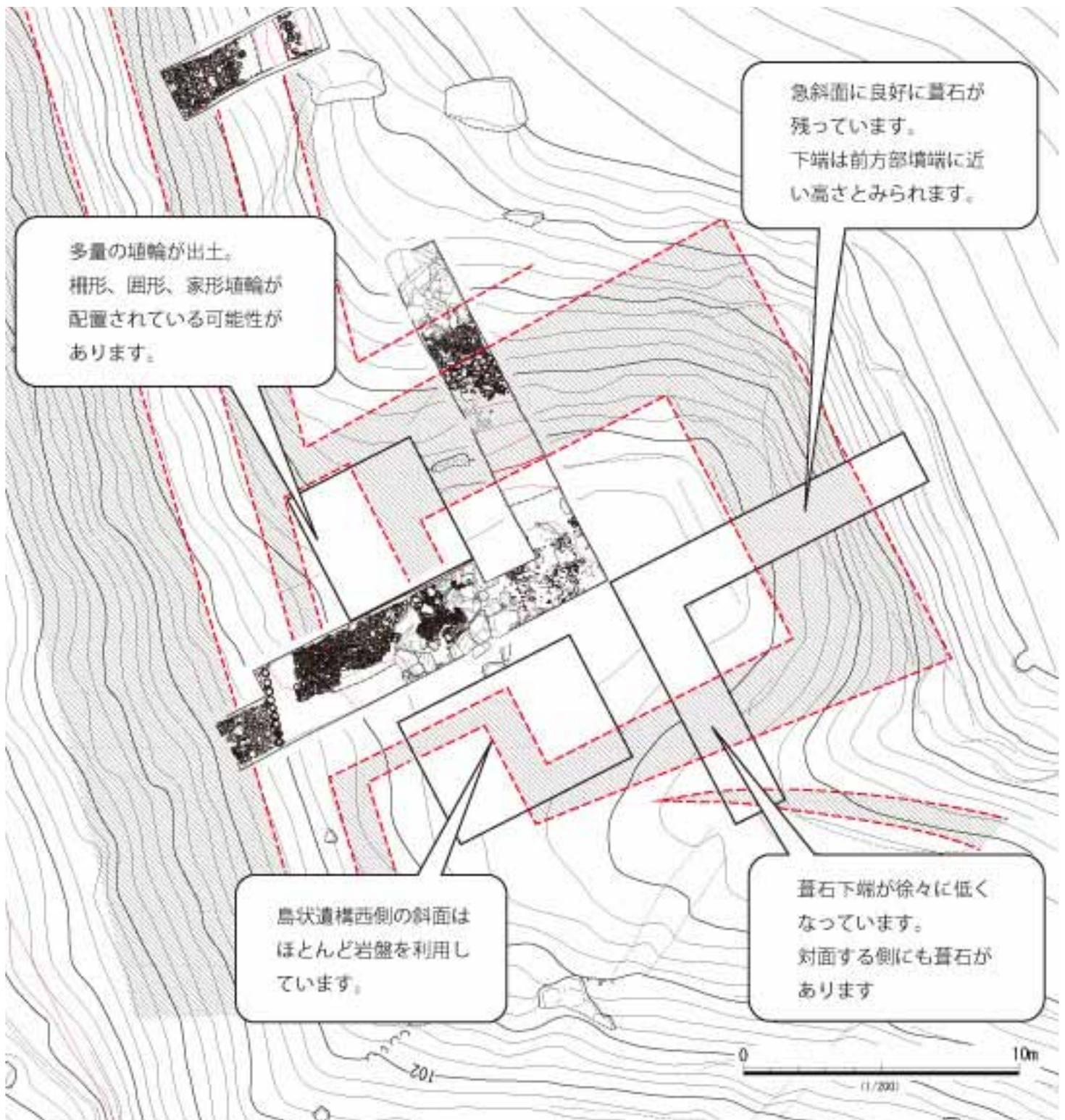


金蔵山古墳墳丘と調査区の位置

発掘調査の概要

岡山市教育委員会では金蔵山古墳の墳丘の規模、形態、構造等を追求し、将来は史跡等の保護の措置を図っていく計画で発掘調査を実施しています。これまでの調査では、前方部の西側に造り出しが附属すること、前方部西側側面、北西隅角の墳端の状況や構造が判明しました。

昨年度の調査では、東側くびれ部に検出した遺構が「島状遺構」である可能性が高いことがわかりました。今年度の調査では、この周辺を調査対象とし、「島状遺構」の構造や埴輪の配置状況などを追求しています。



「島状遺構」

今年度の調査では、墳丘と「島状遺構」の間をつなぐ陸橋を検出しました。陸橋は斜面を小振りな葺石で覆っています。陸橋の両側の墳丘と「島状遺構」の間は岩盤を掘りぬいて広い溝状にしており、下面は標高 99.0～98.5 m 程度の平坦面となっています。島状遺構側の斜面は大部分岩盤をそのまま利用しており、部分的にしか葺石がありません。墳丘との間の溝状部分は、昨年段階では底面に礫を敷いていることを予測しましたが、部分的に整地をしているだけで礫などは敷いていないことがわかりました。

島状遺構の東側斜面、南側斜面には葺石が非常によく残っていました。

東側斜面は葺石の下端が標高 96.5 m 程度のもので、前方部の墳端とほぼ同じ高さです。一方、南側斜面の葺石は下端が西に次第に高くなっており、前方部と後円部の墳端の高さの差をこの部分で解消しているようです。葺石の外側は東側に開く溝（谷）状になっており、反対側の斜面にも葺石が施されています。

島状遺構の上面は全面に小さな円礫を敷き詰めていたようです。埴輪は配置状況のわかる状態では出土していませんが、墳丘との間の溝状部分から大量の破片が出土しています。

出土埴輪

出土埴輪には墳丘側から転落したとみられるものと、島状遺構上にもともとあったとみられるものの、溝状の部分に配置されている可能性があるものがあります。

墳丘側から転落した埴輪は円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、墳頂部からのものとみられる直径 70cm ほどもある大型の円筒埴輪、笠の直径が 1 m 近い大型の蓋形埴輪を含みます。

島状遺構上からは小破片しか出土していませんが、柵形埴輪とみられるものが目立ちます。また、蓋形埴輪も認められます。

墳丘との間の溝状部分には下面付近に柵形埴輪、冪形埴輪、冪形埴輪が集中しています。現在検討中ですが、柵形埴輪が複数完形に近い状態で出土しており、この部分に配置されていた可能性があります。

まとめ

今年度の調査で、東側くびれ部に「島状遺構」が存在することが確実となりました。島状遺構は周辺の葺石や陸橋部分の葺石など非常に残りがよく、また高低差のある前方部と後円部の境にあたることから複雑な形態をとっているようです。残念ながら島状遺構上の埴輪の配置のわかる状況は残っていませんでした。しかし、墳丘と「島状遺構」の間に形象埴輪が配置されていた可能性があります。

「島状遺構」は他の古墳の例では、水鳥形埴輪や船形埴輪など水辺の情景を表す埴輪が伴うものがありますが、金蔵山古墳では今のところ確認されていません。一方で金蔵山古墳は墳丘の両側で造り出しと島状遺構を造り分けており、その両者でどのような性格の違いがあったのか、それぞれどのようなマツリが行われたのか解明する手がかりとなることが期待されます。